のんた 2

山口の土地改良

vol.2
Spring 2000

21世紀の食料・環境・ふるさとを考えよう!

巻頭レポート①
米づくり体験ツアー

のんたエッセイ
わがふるさとに想う

全国ネットワーク設立記念フォーラム
美しく住みよい田園空間を創造しよう

ご存知ですか?
農園ふるさときゃらばん

入選作品のご紹介
食料・環境・ふるさと **写真コンテスト**

ふるさと紀行
やまぐち あ・ら・かると

わたしのアドベンチャー日記
in **重源の郷**

食料・環境・ふるさとを考える
山口県地球人会議

はじめての稲刈り体験

米づくり体験ツアー

実施レポート

tour report

平成11年7月に、新しい法律「食料・農業・農村基本法」が制定され、日本の農業は、新世紀に力強く歩み出しました。
このような重要な時期に、地球人会議では「水と土と農」という統一スローガンのもと、
全国で40万規模のイベントを展開しました。これらさまざまな活動は多くの一般市民に
「水と土と農」の大切さを考えてもらう有意義な活動であったと思います。
今回の巻頭特集では、その「水と土と農」全国キャンペーンにあわせて、山口県で実施されたイベントをご紹介します。

山口県地球人会議では《稲刈りを体験し、食べ物の大切さを考えてみませんか》をキャッチフレーズに参加者を募って『米づくり体験ツアー』を実施しました。

「私たちが毎日食べているお米はいったいどのようにして作られているのか？」を理解してもらうために、特に町に住んでいる人達を対象に、米の収穫時期にあわせて農村を訪れて大切な食料が生産される過程を見たり体験してもらいました。

ツアーの見学地はため池や棚田、水路、堰など米が収穫されるまでに必要な施設、またカマを使った稲刈りや昔ながらのはぜかけ作業を体験し、最後は刈り取ったモミを処理する大きな施設も見学しました。

山や田に囲まれた仁保地区

平成11年10月3日(日)、天候薄曇りのち晴れ。

大きな田が広がる名田島地区

参加者の多くは小学生を中心とした親子で総勢40余名。午前9時に山口県地球人会議の事務局のある山口県土地改良事業団体連合会（山口市）を貸切バスで出発。一路、山口市北部の仁保地区へと向かいました。

最初の見学地は、米を作る上で欠かせない施設である「ため池」でした。

米が作られるまでに水は欠かせないものです。田植えの時期から稲刈りの前まで、田んぼに水を補給しなければ稲は実りません。このため、ため池から水路を通って田んぼまで水を補給しています。ため池は、日照り続きで水が不足するような時には特に必要とされる施設ですが、現在山口県内にはこうしたため池が約1万2千箇所もあります。

農業用水として必要なため池(山口市仁保)

次の「棚田」の見学では、地元の農家の方から参加者に棚田での米づくりの苦労についてのお話しをしていただきました。「棚田」とは急な斜面や山腹に階段のように作られた水田のことをいいますが、昔から棚田では農家の方々が大変な苦労をしながら米づくりを行ってこられました。

棚田の風景(山口市仁保)

地元農家の説明

最近では、水を一時的に蓄えるダムとしての役割を持つ棚田、美しい景観である棚田を守ろうという運動も行われています。

続いて「堰」と「水路」を見学しました。堰も水路もため池と同じように米づくりに欠かせない水を田んぼに補給する施設です。「堰」は川を流れる水をせき止めて、水路を通って田んぼに水を運ぶための施設です。「水路」は、川やため池などから田んぼに水をあてるための水の道です。最近は、その川や水路が汚れてきていて、ホタルや昆虫が減ってきているような気がします。

田んぼに水を補給する水路(山口市仁保)

田んぼに水をひくための堰(山口市仁保)

いよいよお待ちかねの「稲刈り」体験です。たわわに実った「こしひかり」を参加者一人ひとりが昔ながらのカマで刈り取り、さらに最近では珍しくなった「はぜかけ」の作業も体験しました。

収穫前の田

稲刈りの仕方を説明

稲刈り

稲刈りを初めて体験された参加者も多く、日本の米づくりの原点であるこの「稲刈り」体験によって、食料の大切さを身をもって感じていただけたのではないかと思います。

はぜかけ

稲刈り体験で心地よい汗をかいた後は、地元の方々がおいしい炊き込みご飯を準備してくださり、地元の方々と一緒に格別の昼食をいただきました。

稲刈りを終えて

smile

午後は再びバスに乗って移動し、山口市南部の平坦地・名田島地区を見学しました。

ほ場整備が行われ広々とした田んぼの風景を見ながら、中山間地での農業と平坦地での農業を比較し、米づくりの違いについての理解を深めました。

また「カントリーエレベーター」の見学では、刈り取ったモミを処理する大きな機械に参加者から驚きの声があがっていました。

「米づくり体験ツアー」日程

8：50	県土連ビル集合
9：00	貸切バスにて出発
9：15	山口市仁保中郷「二枚ため池」見学
9：40	〃　上郷「棚田」の見学
10：00	〃　「水路」「堰」の見学
10：30	〃　交流田にて「稲刈り体験」と「収穫祭」に参加
～12：30	
13：35	山口市名田島「大規模圃場」見学
14：00	〃　「カントリーエレベーター」見学
15：00	県土連ビル帰着

カントリーエレベーター

こうして「米づくり体験ツアー」は無事終了。この体験ツアーを通じて、参加者の皆さんには、米を作る作業や農業に関心をよせていただけたのではないかと思います。

将来、農業に従事したいと希望を持つ子ども達がいてくれたらと願いながらの1日でした。

エッセイ 2
essay

わがふるさとに想う

熊毛町 八代盆地

FM山口株式会社顧問●福田 礼輔
text by=Reisuke FUKUDA

私には中山間地域のふるさとがある。山口県熊毛郡の最北端、中国山地が瀬戸内に向って傾斜してゆく山なみに囲まれた小さな盆地、熊毛町八代がそのふるさとである。

わがふるさとの心象風景は、四季それぞれの表情をみせる里山と田圃と小川のせせらぎと、そして秋になれば遠くシベリアの原野から間違いなくこの盆地に飛来してくるナベヅルたちである。

戦前、昭和初期の日本の農村の生活環境は現在と比較して大変きびしいものであったが、子どもから老人まで豊かな自然の中で村は元気だった。

秋、刈り入れの終了した田圃に霜がおりる頃、ナベヅルの啼く声が村の朝のしじまをついて聞えてくると、「ツルが来た！」と待ちわびていた村人たちは安堵の胸をなでおろし、吹雪の冬が去りコブシの花が咲く春までの半年間、村はナベヅルとの共存生活に入る。

1940年（昭和15年）前後には、300羽を超えるナベヅルが飛来し、小学校へ通う子どもたちが雪の田圃で遊ぶツルに声をかける光景も見られたものである。

そのナベヅルもここ数年の飛来数は20羽前後に激減してきた。

盆地には拡幅舗装された道路が走り、徳山、下松、光などの周南地域へ車で約20分となった。開発の波は畦道を走りレンゲ畑で遊んだ子どもたちの姿を消し、歓声が聞えていた小学校の校庭を淋しくした。里山につづく棚田を耕しているのは老夫婦である。

しかし、私はこのふるさとを捨てる気持ちにはなれない。

シイノキ、タブノキ、アラカシなどの屋敷林に囲まれた生家がある限り、ヒマを見つけては帰省している。

庭にあるヤマザクラの老樹がこの春も花いっぱいの枝をひろげ、緑い若葉をつけている。ウグイスが啼きメジロが庭木に遊ぶ。私の姿を見てキジバトの夫婦が庭におりて餌を待っている。野菜畑に通じる道をイタチが走り抜ける。ここだけは百年変わらぬ自然が息づいているのだ。

ナベヅルと共生できる自然、それは山口県の自然環境保全のひとつのバロメーターとも言える。

戦後の経済成長に伴う大都市集中社会は日本全土の中山間地域から若者たちを流出させた。戦前の農村には元気があり、盆踊りや秋祭りには村はひとつになったが、それも遠く追憶の中にあるだけのものとなっている。

八代盆地だけではない。都市と農村の距離は車社会では近くなっていても生活環境としての距離は遠いものとなった。

その距離を引き寄せることが21世紀の都市と農村を結んだ社会構造ではあるまいか。災害時に見られるように20世紀に構築された過密都市はこれからの都市像ではない。

21世紀は都市と農村が連結された社会が理想となる。

里山や小川に町の子どもの歓声がひびき、町の若者が秋祭りのみこしを担ぐ日が来るよう山のふるさとも頑張って欲しい。

食料・環境・ふるさとを考える 地球人会議

全国ネットワーク設立記念フォーラム

美しく住みよい田園空間を創造しよう

「地球人会議」は、食料・農業・農村の価値を見直し、都市と農村が共生する美しい田園社会を築くため、考え、発言し、行動する人々の輪を広げようとする活動です。この全国ネットワークの設立を記念し、平成11年6月5日、銀座セゾン劇場でフォーラムが開催されました。

フォーラムは、川勝平太氏の記念講演とパネルディスカッション、須貝智郎さんとAKEMIさんの地球人コンサートの2部構成で行われました。その折の、地球人会議全国呼びかけ人・沢田先生と富山先生のメッセージ、そして第1部の講演とパネルディスカッションの要旨をご紹介します。

地球人会議 全国呼びかけ人メッセージ

都市と農村が共生する田園社会を

国際高等研究所所長
元京都大学総長
沢田 敏男氏

経済大国となった日本は、バブル経済の崩壊を経て、戦後最大の曲がり角に来ています。経済効率至上主義を見直し、ゆとりのある成熟した社会を目指すためには、地球的視野に立って農業・農村の価値を再認識する必要があります。地球人会議は、このような観点から、食料・環境・ふるさとの問題を市民のみなさんと一緒に考えていこうという活動であり、1996年から各地で様々な取り組みを行っています。

食料・農業・農村基本法の下で新たな農政が展開される21世紀は、都市と農村が共生する時代であり、農村は「美しく住み良い田園社会」「安心、安全な田園社会」として、国民全体の生存基盤となるべきだと考えます。

21世紀は物をつくる喜びを取り戻す世紀

評論家・立正大学教授
富山 和子氏

「水田はダム」と私が言い出したのは、もう4半世紀も以前のこと、実に勇気がいりました。でも発想を変えてみればわかること、川の水は、森林と水田が雨を受け止めて作ってきたのです。ところが、山村は過疎、農業も風前のともしびです。そこで私は、「林業、農業を守れ」「水田はダムだ」ということを繰り返し訴えてまいりました。この地球人会議も、農業を守るための地道で大切な運動です。21世紀の資源は水と土です。農業・林業は、国民みんなで、命がけでまもらなければならないところまで来ています。

21世紀は、人間が汗を流して物をつくる喜びを取り戻す世紀、取り戻せないと生き残れない世紀であると思います。

記念講演

地球のモデルとなる「庭園の島・日本」の再生

国際日本文化研究センター教授
川勝 平太氏

明治時代の日本は「富国強兵」を国是としましたがこれからは、私たちの文化をよくするために経済力を使っていく時代、物心共に豊かにするという意味の「富国有徳」が、21世紀の日本の理想としてふさわしいでしょう。

では、具体的にどういう国の姿が理想でしょうか。まわりの田園や森林は、日本人が作りあげてきた「第二の自然」です。それは自然と共生する姿です。「第二の自然＝庭」が、亜熱帯の沖縄から亜寒帯の北海道まで広がる「庭園の島＝日本」が理想の姿です。それを実現するうえで、地球人会議の役割は大きいと思います。

日本が近代の世界史に登場した時、日本を訪ねたヨーロッパ人たちは、日本を「花と緑の織りなす庭園のような島国」と描写し、彼らの憧れを誘いました。日本の印象は「生活景観、自然景観が美しい国」というものでした。ところが日本人はそのことに気付かず、急速に都市化を進め、田園都市の建設に失敗してきました。しかし、昨年、橋本内閣のもとで「21世紀の国土のグランドデザイン」が策定され、2015年をめどに、歴史と風土に根ざした「庭園の島」ともいうべき日本を取り戻そうという動きが始まっています。

南北3千キロに広がる日本列島は、地球生態系のミニチュアと言えます。「庭園の島＝日本」の形成は、「水の惑星＝地球」を庭園の島にするという志につながっており、私たちの使命だと信じます。

パネルディスカッション

美しく住みよい田園空間を創造しよう

都市の過密と農村に残された美しい景観

福島　「美しく住みよい田園空間の創造」をテーマに、21世紀に向け、日本の農村をどう守り活性化させていくか、また、農村と都市との共存はどうあるべきかを考えてみたいと思います。

それではまず、日本全体の景観について皆さんはどのようにお感じでしょうか？

川勝　イギリスはカントリーサイドを大事にしてきたが、日本はGDPとか、お金に換算した価値ばかりを追った結果、生活景観の豊かさが感じられない国になっています。農村に目を向け、富の定義を変えるべき時代です。

ダニエル　私は、奈良、佐賀、山形に住んで、地方の良さを味わってから東京に来たので、東京は別の国かと思いました。過密化した都市と、美しい景観は残されているけど過疎化に悩む田舎、

この格差が大きいですねぇ。

アン　私は、農村や漁村で民俗学のフィールドワークをして全国を回っているんですが、日本は地球生態系のモデルといえます。

しかし、その豊かな日本が少しおかしくなってきていますね。

小山　私ども飯山市の農村風景を、皆さん「とても美しい」と言って評価してくださいます。私どもも地元の景観に自信を持って農村を守っていかなくてはと思っています。一方、都会の劣悪な環境を見ると、子どもたちがかわいそうです。

小山和宏氏

農村の景観も変貌する中、高まる景観保全への関心

福島　国民の関心度は、どうなんでしょう。

森田　「21世紀の食料・環境・ふるさとを考える委員会」で実施した意識調査によると、「農業・農村の伝統的な景観や文化の保全」について、「非常に重要」もしくは「重要」が91％。棚田のような生産性の低い農地についても、景観や環境保全の観点から、行政も含めて維持・保全すべきという意見が86％に及んでいます。

川勝　9割の人たちが、農業・農村を生産基盤としてだけでなく、国土を保全し美しい景観を作る公共の財産と考えています。棚田についての結果も同様で、これは心強いですね。

アン　日本の棚田を初めて見た時、驚くとともに、日本の農家の人はすごいと思いました。

農業の振興と、都市の人たちとの交流が農村の景観を守る

福島　この素晴しい田園風景を守っていくためには、農業がきちんと営まれていく必要があるわけですが、高齢化や後継者不足など、現在、非常に厳しい状況に直面していますよね。

小山　アメリカやカナダの農業と違い、日本の農業は、集落で協力して棚田や水路を守る、というように大勢の人間で支え合うことが必要です。「棚田はいいな」と思っても、過疎化が進んでは守れない。これからは都会の皆さんとも交流を深め、応援していただきたいですね。飯山市での、その一つの試みがグリーンツーリズムなんです。都会の小中学生が農家民宿に泊まり、農業を体験するというもので、大人のツアーもあります。都会の人たちに農業の価値を知ってもらい、農村の活性化にもなってます。

ダニエル　小さい時の農業体験は大事です。採れたての野菜の味は格別だし、農家の皆さんの苦労もわかるようになります。

ダニエル・カーター氏

地球人会議の活動に期待！魅力ある田園空間を創造しよう

福島　この地球人会議も、都市と農村の交流を深めるために設立されたと伺っていますが？

森田　食料や環境問題というのは、地球的な視野に立って考える必要があるわけです。地球人会議は、そういう観点から日本の農業・農村・ふるさとのことを考えてもらおうと県レベルで始まった活動で、毎年各地でさまざまな取り組みが行われています。

福島　このたびの全国ネットワークの設立で、各地の活動の連携がさらに図られるわけですね。ところで、そのような活動を通じ、農村に住もうという人も増えてくるのではないでしょうか？

川勝　たしかに、自然環境の豊かな所に住みたいという人は増えていますね。かくいう私も、一昨年、軽井沢の近くの山辺に移り、豊かな環境の中で家庭菜園を楽しんでいます。

ダニエル　しかし、せっかく農業をやりたいと思っても土地を貸してもらえないという人もいる。こういう規制は緩和できないですかね。

アン・フロドゥール氏

アン　90年代に入って制度改善の動きが出てきて、非農家出身者でも農業ができる時代が来つつあるんです。研修制度はすでにありますし…。

ダニエル　私も将来は、山形の農村に住み、できれば少しでも農業をやりたい。都会人が住みたくなるような農村の環境整備を、せひ、やってもらいたいですねぇ。

福島　田園空間博物館という新しい事業が始まったそうですね。

森田　フランスのエコミュージアム活動を参考に、地域資源を保全しながら、美しい農村風景を作り上げ、その中で農業と経済の活性化につなげていこうという事業で、昨年制度化されました。

森田憲三氏

地方が独自の魅力を発揮し、豊かな日本を実現しよう！

福島　最後に、豊かさの実感できる理想的な日本の将来像についてお聞かせください。

川勝　これからは地方の時代で〝多中心〟となります。交通網や情報網の整備で、地域が連携され、自然と共生したゆとりのある生活ができるようになるでしょう。

アン　皆さんに田んぼをはじめ農村のファンになってもらいたい。そして、自分にできる方法で農村を応援してくれればいいな、と思います。

小山　戦後私どもは、地球が有限であることを忘れ、右肩上がりの生活を望んできました。その反省のもとに、有限な地球でどう生きていくかを考えなくてはいけない。私は、この地球人会議がそういう役割を果たすと思っています。

福島哲子氏

福島　都市と農村が共生する美しい田園社会を築くために、私たち一人一人がそれぞれの立場で考え、行動を起こす時期に来ていることを実感します。本日はありがとうございました。

（平成11年6月5日収録）

食料・環境・ふるさとを考える山口県地球人会議　役員

○会　長
日下達朗（山口大学農学部教授）

○副会長
福田百合子（中原中也記念館館長）

○委　員
牛尾　一（山口県土地改良事業団体連合会副会長・美祢市長）
江原　清（日置町長）
大西紀夫（山口県農業協同組合中央会専務理事）
岡林久熊（山口県林業協会会長・鹿野町長）
栗林和彦（写真家）
佐々木美都喜（山口県消費者団体連絡協議会代表幹事）
佐藤　登（前山口大学教育学部教授）
清水幹雄（山口県自然観察指導員協議会会長）
藤野正介（山口県農業士協会副会長）
福田礼輔（FM山口株式会社顧問）
三嶋八重子（生活改善実行グループ連絡協議会会長）
宮本邦彦（山口新聞山口支社長）
山岡一衛（山口市仁保土地改良区常務理事）
脇坂宣義（宇部短期大学名誉教授）

（アイウエオ順）

ご存知ですか？

当世流行面白一座

劇団 ふるさときゃらばん

musical company

ちかごろはやりのおもしろげきだん

母・悦子

祖母・タマエ

過疎に悩む村や町、そして不景気に喘ぐ現代日本を生きる人々にエールを送る『ふるさときゃらばん』のカントリーミュジカル第8弾『噂のファミリー1億円の花嫁』。平成12年7月8日(土)、山口市民会館にて、いよいよ山口公演が行われます。

平成12年7月8日(土)山口公演決定！

撮影・高橋一

息子・晃

劇団『ふるさときゃらばん』は、総勢100名余りのスタッフで手づくりのミュージカルをたずさえて全国の町や村を巡演しているミュージカル劇団です。

1983年の劇団創設以来、全国47都道府県858自治体343市424町91村で公演、2640ステージをこなし、242万人もの観客を動員してきました(2000・1現在)。

さらに国内のみならず、1988年には海外にも進出、日中国交正常化15周年記念文化使節として招待され訪中し、北京をはじめ中国国内4都市で公演、1991年には日米合作ミュージカルをたずさえアメリカ合衆国内7州10都市を巡演、1992年にはバルセロナオリンピックの“オリンピック芸術祭”に招聘参加するなど、その活躍ぶりは海外でも高い評価を得ています。

劇団『ふるさときゃらばん』の公演方式は、まず地元に働きかけて受け入れ組織を作り、交流を深めながら公演を実施し、それを成功に導いていくというもの。このため人口2千人という小さな村から大都市まで『ふるさときゃらばん』の行く先々では、公演主催に奔走する人々がいるといいます。そしてその人気の秘密は、テーマが日本の風土の中や現代を生きる人々の視点から作りだされていて、地域の人々の手によって上演され続けているからだといいます。

劇団 PROFILE

1983 ●劇団創立。山形県全市町村公演。

1985 ●文化庁主催・第40回芸術祭賞受賞。（カントリーミュジカル「親父と嫁さん」）

1987 ●第3回日本舞台芸術家組合賞受賞（作・演出　石塚克彦）。

1988 ●日中国交正常化15周年記念文化使節として招待され訪中。（上海、北京、杭州、懐柔県でコンサート）

1989 ●第6回日本イベント大賞・最優秀企画賞受賞。

1991 ●日米合作ミュージカル「LABOR OF LOVE」を日米両国で公演。

1992 ●日本一周（47都道府県）公演達成。
●バルセロナオリンピック芸術祭演劇部門に招聘。

1993 ●子ども参加型エコロジーミュージカル「クマゴンの森」制作。
●10周年記念大パーティin幕張メッセ開催

1994 ●第19回菊田一夫演劇賞受賞。
●「裸になったサラリーマン」制作。東京で5ヶ月に及ぶロングラン。

1995 ●第1回全国棚田（千枚田）サミット「男のロマン女のフマン」上演。
●第11回日本舞台芸術家組合賞受賞（俳優・振付　天城美枝）。

1996 ●第4回スポニチ文化芸術大賞グランプリ受賞。（「裸になったサラリーマン」）

1997 ●第4回水産ジャーナリストの会年度賞受賞。（ミュージカル「パパは家族の用心棒」）
●サラリーマンミュージカル「Oh!マイSUN社員」FURUCARA（フルキャラ）シアター100ステージロングラン公演。

1998 ●夏まつり「チョー面白座興」
●参加型ミュージカル「駆けろ!架けろ!YATTOSEY」上演

1999 ●カントリーミュージカル第8弾「噂の花嫁1億円の花婿」全国公演スタート。

劇団ふるさときゃらばん

●本部事務所
〒184-8577　東京都小金井市本町6−5−3
TEL.042-381-6721

●お問い合わせ先
山口公演に関するお問い合わせは、
「山口県土地改良事業団体連合会」まで
TEL.083-933-0035

撮影：鈴木徳二

1999年2月、和歌山県上富田町で初演され全国公演がスタートした新作カントリーミュージカル『噂のファミリー1億円の花婿』は、ある酪農一家の物語です。

奥州酒城町の山間部、過疎に悩む八ヶ平を舞台に、夢と希望で山や田んぼが彩られていく（現代のメルヘン）が、田舎の金融中豪雨を生き抜いた牛の話などのエピソードを織り混ぜながらおもしろおかしく、そして時には切なく繰り広げられてゆきます。

脚本・演出を担当した石塚克彦さんによると「取材に歩いても、新聞・テレビを見ても不景気で気が滅入るような話ばかり。だからその不景気を突き抜けるような楽しいハズミのあるドラマを観客に届けたかった」と。

その『噂のファミリー1億円の花婿』は、現在全国各地を好評巡演中で、7月にはいよいよ山口市でも公演が行われます。

撮影：鈴木徳二

やまぐちの農山漁村景観を活かした地域づくりコンクール

食料・環境・ふるさと写真コンテスト

contest

山口県内の農山漁村の良さを再発見していただこうと「水・土・人・くらし」をテーマに、平成11年8月から12月にかけて「食料・環境・ふるさと写真コンテスト」を開催しました。応募総数406点、県内各地から寄せられた農山漁村の風景や人々のくらし、伝統文化などを撮った数々の作品のうち、入賞作品19点を誌上でご紹介いたします。

最優秀賞

《輝き》 阿武町福賀
山尾 正美(山口市)

優秀賞

《梅雨の晴れ間》 油谷町
藤永 照美(下関市)

《秋の頃》 田万川町
清原 雪江(長門市)

入選

《水のよろこび》 山口市宮野
山下 登子(山口市)

《海の男たち》 萩市三見
松本 照夫(萩市)

《どろんこの土俵》 山口市大内
吉田 健次(山口市)

佳作

《無題》 油谷町
三嶋 光(下関市)

《お茶まつりの日》 宇部市小野
福田 勝(下関市)

《楽踊り》 油谷町
谷山 綾子(下関市)

《豊作》 熊毛町
賀屋 敬男(岩国市)

《合鴨放鳥の日》 菊川町
藤永 照美(下関市)

《田植え》 油谷町川尻
池永 俊昭(豊浦町)

《青のりとり》 豊北町粟野
木下 和巳(豊北町)

《とりたての魚買ってちょうだい》 宇部市東岐波
橋田 敏治(宇部市)

《秋吉台の山焼きを支える集落の人たち》 秋芳町秋吉台
岡 弘子(山口市)

《夕照の棚田》 油谷町後畑
新田 義明(小郡町)

《海を渡る神輿》 徳山市粭島
米田 宇一(山口市)

《収穫のあいまに》 油谷町
佐伯 静枝(小郡町)

《早朝の農作業》 美東町
田中 正司(萩市)

主催／やまぐちの農山漁村景観を活かした地域づくりコンクール実行委員会(山口県、山口県土地改良事業団体連合会、山口県新むらづくり運動推進協議会、食料・環境・ふるさとを考える山口県地球人会議)

後援／中国新聞、山口新聞

協賛／富士写真フィルム株式会社

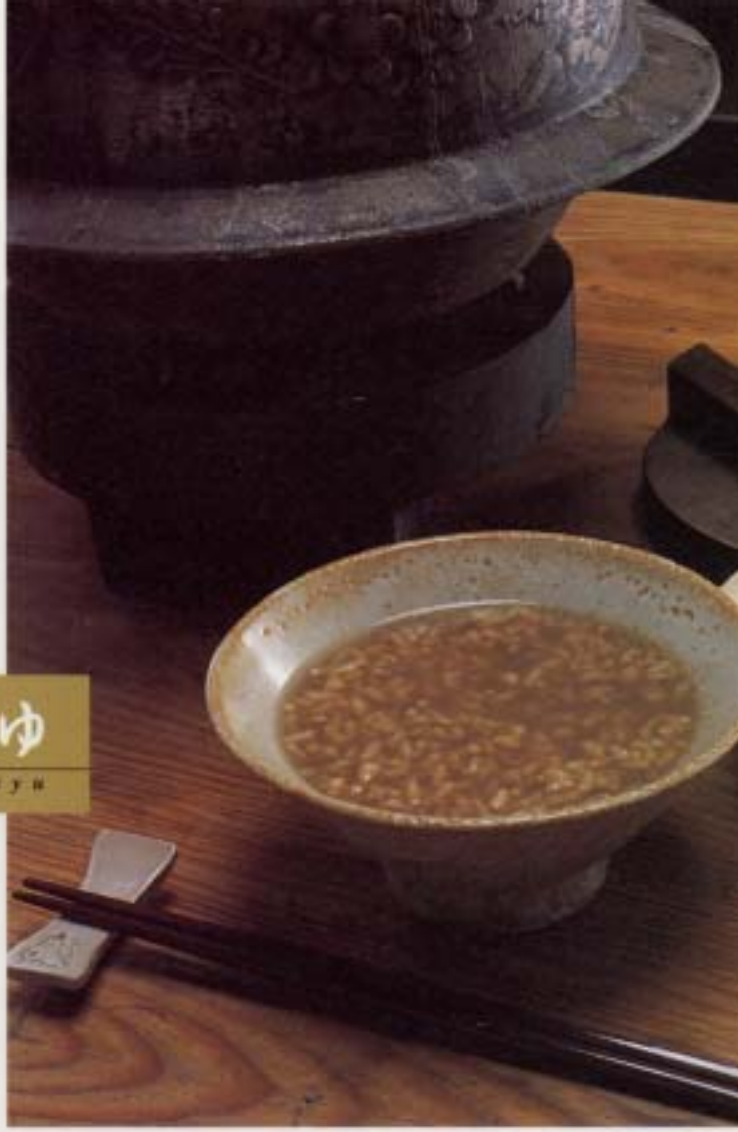
Yamaguchi a la carte ①

郷土料理

ふるさと紀行

やまぐち あ・ら・かると

このシリーズでは、ふるさとに伝わる様々な風習や伝統の品々をテーマ別にご紹介していきます。
今回のテーマは、豊かな自然に恵まれた山口県の風土に育まれた『郷土料理』。
みなさんにもなじみの深い山口県の郷土料理を、簡単な作り方とともにご紹介します。



茶がゆ

Chagayu

山口県の郷土料理として知られる「茶がゆ」は、その昔、米の収穫量が十分でなかった頃に節米食として作られたのがそのはじまりと言われています。ほうじ茶に米を入れて炊き上げる素朴な味わいに、大島郡や岩国市、玖珂町などの地域をはじめ、今も茶がゆを常食としている方は少なくありません。また、現在では健康を保ち長生きをするための健康食、養生食としても人気があります。

作り方 Let's cooking!

❶ 晒木綿で作った小さな茶袋にほうじ茶を入れ、強火にかけて約15分ほど煎じ出す。
❷ 水の量の約1割の米を入れ、そのまま約20分ほど強火で炊いたら出来上がり。途中でふきこぼれそうになったら蓋をずらし、火加減を調節すること。好みにより、粥の中にイモや小豆などを入れてもOK。

けんちょう

Kenchou

豆腐と大根や人参などの野菜を油で炒め、醤油で味つけをして煮る「けんちょう」は、今も山口県下各地で作られ、食されている郷土料理です。精進料理として法事などにも用いられていますが、冬のお惣菜として欠かせない家庭料理としても親しまれています。

作り方 Let's cooking!

❶ 大根は薄いいちょう切りにし、豆腐は2等分にして水きりしておく。
❷ 鍋に油を熱し、大根と水きりした豆腐を手で崩しながらいれて炒める。
❸ 全体に油がまわったら、酒、醤油で味付けして煮る。大根に醤油の味がしみたら出来上がり。
❹ 好みで材料に里いもやコンニャク、油揚げ、鶏肉などを加えてもよい。

山口県独特の郷土料理といえば必ずといっていいほどその名があげられる「いと煮」。昔からほぼ県下全域で四季を問わず祝儀、不祝儀ともに用いられてきた行事料理です。小豆と白玉団子を主体に甘みのある味付けに仕上げるのはどこも同じですが、それに人参やゴボウなどの野菜を加えたもの、野菜はあまり入れず汁気がなくなるまで煮つめたもの、椎茸や蒲鉾をいれた汁気の多いものなど、中に入れる材料や味付けは所によって少しずつ異なります。

いとこ煮

Itokoni

作り方 *Let's cooking!*

❶ 洗って一晩水につけておいた小豆を火にかける。沸騰したら一旦火からおろして水を替え、再び火にかけ弱火で小豆の形が崩れないように煮て、柔らかくなったらザルにあげておく。煮汁は捨てる。

❷ 昆布だしをかなり多めの砂糖とごく少量の醤油で調味して煮立て、①の小豆を加えてさらにひと煮立ちさせてから火を止め、そのままおいておく。

❸ 白玉粉は水でこね、耳たぶくらいの固さにして熱湯でさっとゆでて水に浸しておく。
干し椎茸はもどして細切りに、蒲鉾は薄いいちょう切りにし、ぎんなんはゆでて甘皮をむいておく。

❹ ③と④を②の煮汁に入れて小豆とともにもう一度煮て、味を整えて火をとめる。これを冷ましてから器に盛っていただく。

ちしゃを酢味噌であえた郷土料理「ちしゃなます」は、山口県内で広く親しまれている郷土料理です。ちしゃは「ちしゃっぱ」とも呼ばれ、県内に豊富に出回っていますが、ちしゃなますには少し赤味を帯びたちりめんちしゃを使うのが一番良いようです。ちしゃの葉に含まれる多少の苦味と酢味噌のほのかな甘みとさわやかな風味がとても良く合い、人気があります。元々は酒の肴として考案された料理だったようですが、いまではお惣菜としても食されています。

作り方 *Let's cooking!*

❶ ちしゃはよく洗い、アクを抜くためにしばらく水に浸しておく。

❷ 味噌をすり鉢ですり、酢、みりんをあわせて酢味噌を作る。これにチリメンジャコやイリコなどの子魚を細かく刻んで混ぜる。

❸ ちしゃを食べやすい大きさに手でちぎり、②の酢味噌をつけて食べる。

ちしゃなます

Chisyanamasu

第2回

わたしのアドベンチャー体験日記 in 時を超えた夢工房 重源の郷

toki o koeta yumekoubou CHOUGEN no SATO

防府市在住の田村さんファミリーが徳地町の『重源の郷』でいろいろな体験をされました。長女のみなみちゃん（小学4年生）の体験レポートをご紹介します。

緑豊かな山々とのどかな田園地帯とがひろがる徳地町、『重源の郷』はその徳地町に「時を超えた夢工房」をキャッチフレーズに平成10年にオープンした新しいテーマパークです。

園内は、レストランや工芸品ギャラリーのある〈庄屋〉、森林浴に最適の〈椿入りの道〉、重源上人はじめ徳地町の郷土資料を紹介する〈文化伝承館〉、木工細工や紙漉き等が体験できる〈ふれあい工房〉、アスレチック体験が楽しめる〈ちびっこ山村広場〉など見所・遊び所が満載、子どもから大人まで1日たっぷりと楽しめます。

今日は、お父さんとお母さん、そしていとこのわかなちゃん、モトシ君、カンタ君、おばちゃんと7人で、徳地町の『重源の郷』に遊びに行きました。いつもお父さんは、仕事で家にいないので、ひさしぶりにいっしょに遊べるのでうれしいです。

9時30分
私の家にみんなあつまって、『重源の郷』にしゅっぱつ。

10時30分
山と、たんぼのちかくの細い道をとおって、『重源の郷』につきました。中に入ると、古い家があって、めずらしかったです。その後、へんなバスにのりました。小さなバスでした。バスにのるのがひさしぶりだったのでうれしかったです。

11時
ふれあい工房に行って、木をくっつけて作る家がとてもかわいかったです。作っていると時間がたつのが早かったので、最後までできなかったけどすごく楽しかったです。きりやナイフなどの材料がぜんぶそろっていて、びっくりしました。細かい所を作るのがむずかしかったです。また行ってこん度はちがうものを作りたいです。

12時30分
みんなでごはんを食べにいきました。わたしは「てっぱん焼き」を食べました。しいたけとかやさいとか肉なんかを焼いて食べました。それからお母さんのうどんももらいました。とってもおいしかったです。

13時30分
さかをのぼって大きなスベリ台で遊びました。板をおしりにひいてすべりました。のぼっていくのはきつかったけど、楽しかったです。とっても高くて、ちょっとこわかったです。でもあんまりスピードがでませんでした。おしりがいたかったです。その後、アスレチックで遊びました。木でできていました。とちゅうこけそうになり、こわかったです。

14時30分
最初バスにのったとこを、帰りは歩きました。30分ぐらいかかりました。とちゅう、木のイスや机をつくるところがありました。紙をつくるところもありました。こん度来たときは紙をつくりたいです。

おみやげやさんもありました。ジュースをかってもらいました。ダンゴが食べたかったです。ちょっときつかったけど、いろいろな家や、道があっておもしろかったです。カンタくんはきつそうでした。その後車のとこにいってかえりました。とっても楽しい1日でした。またお父さんと遊びたいです。

田村さんファミリー

ワンポイントアドバイス

おとうさんおかあさんから一言

おとうさん

久しぶりに娘とゆっくり過ごしました。木工細工は思った以上に苦戦し、お父さんらしいところを出せませんでした。残念。それにしても懐かしい風景が随所にあり、子供たちの体験学習にはもってこいの場所だと思いました。

おかあさん

数日前の雪がわずかに残っていましたが、晴天に恵まれ、とても心地よい体験ができました。

はじめての「重源の郷」探訪でしたが、何といっても大自然の新鮮な空気が気持ちよく、素朴なかやぶき屋根ひとつひとつのテーマ館が大変マッチして懐かしくもありました。

ふれあい工房での体験は、豊富な材料と道具の中で子ども達も喜んで創作していた様です。ちびっこ広場では、子ども達だけでなく親も楽しめるすべり台、アスレチックが大好評でした。

年配の方から子どもまで皆で楽しめる望郷の「重源の郷」を満喫させていただきました。次回は父や母と一緒に訪れたいです。

p・s　ちびっこ広場への坂道はいささか疲れました。

INFORMATION

●交通

防府方面から車で約30分
山口方面から車で約30分
徳山方面から車で約40分
中国自動車道徳地ICから車で約10分
山陽自動車道防府西・防府東ICから車で約30分

●利用施設のご案内

【営業時間】
夏季（5月～10月）9:00～17:00
冬季（11月～4月）9:30～16:30

【定休日】
毎週水曜日
※定休日が祝・祭日の場合は営業

【入場料】
大人500円（400円）
小人300円（200円）
※（　　）内は20名以上の団体割引料金

ご意見・ご感想をお待ちしています。

「のんた」では皆様からのご意見・ご感想をお待ちしています。
ハガキ又は手紙でお寄せください。

〒753-0079　山口市糸米2-13-35
山口県土地改良事業団体連合会内
食料・環境・ふるさとを考える　山口県地球人会議「のんた」係　まで

重源の郷

〒747-0235　佐波郡徳地町大字深谷
TEL 0835-52-1250

のんたPhoto Column ②

夕やけこやけで日がくれて…
遊び疲れた夕暮れ、
茜色の雲を背に家路を急いだあの頃、

日だまりの中、
駆けて、跳ねて、転がって、
戯れて、喧嘩して
泣いて、笑って、
空が茜色に染まると
「また明日」と別れた。

あの坂で転んで泣いた。
あの川で友だちと魚釣りをした。
あの畔でみんなでトンボを追いかけた。
いつもさよならをしたのはあの別れ道。

黄金色の夕やけがつれてきたのは、
胸の中にしまいこんだまま
忘れかけていたそんな思い出。

やがて群青色の夕闇がせまるまで
心やすらぐひととき、
いましばらくこのままで――。

発行
食料・環境・ふるさとを考える
山口県地球人会議　事務局
〒753-0079　山口県山口市糸米2丁目13番35号　山口県土地改良事業団体連合会内
TEL083-933-0035 FAX083-933-0048